

---

# IS～インフィニット・ストラトス～ ギアス世界の科学者が転生しました

あまねぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS-インフィニット・ストラatos ギアス世界の科学者が転

生しました

### 【ISBNコード】

N3243T

### 【あらすじ】

神聖ブリタニア帝国。ナイトオブラウンズの一人、メロディアーナ・スレインは死んで目が覚めると赤ん坊、アリエル・デュノアになっていた。

目が覚めた世界はブリタニアが存在しない別世界。その世界にはナイトメアフレームはなく、IS-インフィニット・ストラatosとこう兵器がある世界だった。

## プロローグ（前書き）

この小説は独自解釈、ご都合主義が含まれておりますので注意してください。

## プロローグ

人生とは何が起こるかわからないとはよく言つたものだ。

6年前、私は死んだ。

いや、本当だよ。前世では、神聖ブリタニア帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズの一人、ナイトオブファイブだったんだけど、シヤルル皇帝死後、次期皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア就任が認められず反旗翻したがナイトオブゼロ、榎木スザクの乗るランスロットのMVSに切られて撃墜死されました。  
メイゼー・バイフレーション・ゾーナ

……クソッ。ロイドとセシルめ、ランスロット魔改造しそうでしょ。

いくら私のフローレンス（私の乗つてたKMFの名前）の性能がランスロットより下だつたとはい、瞬殺とかないわー。思い出してからショックで一、二日落ち込んだ。メイドさんやお母さん、心配させてごめんなさい。

その後、転生し赤ん坊になつた私は成長して行くと共に前世の記憶を思い出した。

驚いたことにこの世界は私の知つている世界ではなく別世界のようだ。

まず、この世界にはブリタニアが存在しない。

それだけならばブリタニアが滅んだ未来と言つ可能性もあつたが、

皇暦ではなく西暦、ナイトメアフレームが存在しない、エネルギーがサクラダイトではなく石油を使われているなどと、前の世界と違ったことがあることから別世界　平行世界と判断した。

そして、この世界に生まれて6年、別世界と認識し、現在進行形で混乱している時に世界を騒がす事件が起きた。

### 白騎士事件

日本に攻撃可能な各国のミサイル2341発。それらが一斉にハッキングされ、発射された。

それをたつた一機の起動兵器で迎撃し、撃墜した。

さらに国際条約を無視して各國が偵察機を飛ばしたがそれも撃墜。

結果、ミサイル2341発、戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基を撃破あるいは無力化した。

その日、全世界の人々が最強の兵器IS-1インフィニット・ストラトス-1を知ることになった。

前世、ラウンズと同時に科学者だった私は当然ISに興味を持ち、研究したいと思つた。

しかし、現在私は6歳の幼女。いくら父が軍事企業　デュノア社　の社長だとしてもそんな子供に兵器、ましてはISなんて触る機会なんてなかった。

それでも、何時かISを研究できる信じてそれまでの間、ISに組み込めそうなKM<sup>ナイトメアフレーム</sup>Fに使われた兵器の理論、設計図を書いたり、個人的な研究をした。

ブレイズルミナスに電磁装甲、フロートシステムなどは設計図まで完璧に覚えているから簡単に書けたが、輻射波動やフレイヤ、エナジー・ウイング、前世で研究していた人工サクラダイトは理論しか覚えてないので、実用化には時間がかかりそうだ。

まあ、ISに触れるのは数年後だろうからそれまでの間に完成させればいいよねー。

そう思い私は他人にデータ見られないようにデータをHSBメモリーに写してPCの電源を落とした。

「ンン。

「どうぞー」

「失礼します。アリエルお嬢様」

言葉と共に入ってきたのはメイドのセリア。私が生まれたときからずっと世話をしてくれている人で使用人というよりもう一人のお母さんって感じの人。

「なんの用?」

「お食事の用意ができましたので呼びに。……アリエルお嬢様は何をなさつたのですか?」

「I.Sを調べてたの」

設計図を書く前にI.Sの性能とかを調べてたから一応嘘は言ってない。

「I.S……インフィーブ・ストラトスのことですか。アリエルお嬢様はI.Sに興味あるのですか?」

「既存の兵器の性能を大幅に上回るI.S……私がデュノア社の一人娘であることを差し引いても大変興味深い機体ね」

ちなみに、現在6歳である私は前世の記憶持ちとばれないようこ五歳までは無邪気な子供として過ごしていたが、段々ボロが出始め（め、面倒くさくなつた訳じやないからな！）今では普通に過ごしている。結果、意外や意外。特に怪しまれることなく、親や使人達からは頭のいい6歳児と認識されている。私の五年間苦労返せ。と思つたことは秘密だ。

「でしたら、お夕飯時に旦那様に頼んでI.Sの開発見学を頼んだらどうでしようか?」

「え、今日お父様が帰ってきてるのー?」

「はい。30分ほど前に。それと、先日、フランス政府との交渉によりデュノア社にI.S開発許可が降り、I.S『アーティフ』を渡されました」

「ツ！　今すぐ食堂へ行くわ！　グエッ！」

私が走り出した直後、セリアが私の首根っこを掴まれた。

「お嬢様。早く旦那様とお話したいのはわかりますが、食堂に行く前に手洗いを。それと廊下を走ってはいけません」

「…………はい」

……ホント、セリアはお母さんみたい。

## プロローグ（後書き）

こんな感じでいいのでしょうか？  
初めて書く小説で読みにくいかもしれません、頑張って連載を続  
けようと思います！

## 第一話アリヘルちゃんのIIS 見学（前書き）

続きを書いたら予想以上に時間がかかりました（汗）

今回はもの凄いご都合主義な話です！

## 第一話アリエルちゃんのIDS 見学

ドガシャーン！ と開発室に響く。

開発室には、うつすらと煙が漂っていた。金属が溶けたような独特な臭いもする。

「う、目がチカチカして喉がいたい。

すぐさま、部屋の換気扇を回し、煙をだすとロイドとセシルが咳き込んでるのが見えた。

『ふ、一人とも大丈夫？』

『な、なんとか』

『同じく～』

セシルとロイドの無事を示す声。

『……またですか。メロティアーナさん』

『うう、『めん』

そう。またなのだ。これまで私は何度も実験で爆発させている。

今、私が研究しているのは人工サクラダイトの研究。

現在、サクラダイトの産出量の70%が日本 じゃなくてエリ

アーネだ。しかも、ほとんどフジサンからしか採れていない。

ナイトメアフレームの動力源のユグドラシルドライブの核、コアルミナスはサクラダイトで作られているため、ナイトメアフレームを作るときにサクラダイトは必須だ。さらに、これに利用するサクラダイトの量は、ナイトメアフレームの出力限界に大きな影響を与える。サクラダイトの量によってナイトメアフレームの性能が決まると言つても過言ではない。

しかし、サクラダイトは希少性の高い金属だから高性能機を作るのは経済的に困難なのである。

というわけで私はサクラダイトに変わる電気抵抗の少ない超電導物質を作成しているのだが……見ての通り、全然うまくいってない。

『メロディアーナ、失敗は成功の元と言つけど君の場合、失敗しうぎだよ』

『うーん。どうしても、金属がつまく結合できない。やっぱ、反重力装置を発明しないと無理なのかなー』

宇宙　つまり、無重力空間ではアルミニウムのよつた比重の違う金属を完全に混ざりあう。そのことから、無重力空間でなら人工サクラダイトを作ることが出来るが

『　　そんな世紀の大発明するよりも、直接宇宙に行つて作ったほうが手つ取り早いよ』

『……だよねー』

確かにそんな大発明するくらいなら直接宇宙に行つて作るほうが簡単だ。

第一に重力の存在は確認されているが、どういう原理で重力が発生しているのかは未だ不明な時点で重力の対をなす反重力を作るなんて不可能だ。

『それに～体育会系の君は元々科学者に向いてないからね～』

『……セシル。ロイドが今日の昼御飯、セシルの手料理が食べた  
いつてや』

『何言ひてるの！？ 頼は！？』

『わかりました。張り切つて作りますね！』

おお。料理を頼まれたことがあまりないのか、すゞしくやる気出しつるね。セシル。

『あ、メロディアーナさんの分も用意しますね』

え、。

『こ、これから皇宮の警備に行かないといけないからちょっと時間がない……かな？』

『でしたらすぐに作れるサンドイッチにしますからちょっと待つて下さいね』

開発室から出てキッチンに向かつセシル。

だらだらと冷や汗が止まらない。

………… よしー 逃げよつー

開発室から出よつとしたらガシッ！ と肩を捕まれた。

『ビーハ行ひつとじてゐるのかな～』

『い、いや、だから、お、皇宮の警備に』

『だったら、警備に行く前にしつかりと昼食を摂らないとね～。ナイトオブランズの君が警備中に空腹で倒れたりしたら大変だもんね？』

ギリギリと私を逃がさないよつに肩に握力を加えるロイド。

じつ、モヤシの癖になんでこんなに握力があるのよ！？

『メロディアナさん。お待たせしました』

『早ツー！？』

サンドイッチだから出来るのが速いのは分かるけどまだ、二分と経過してないわよ？

『今日はフルーツサンドにしました』

『あ、ありがと』

フルーツサンドならあんまり変なものは入つてないだろ？と一安

心。

見た目もパンの間にホイップクリームとあんまり悪くはない。

『じゃあ、頂くわね』

サンドイッチを手に取りパクッと口に入れる。

『…………グハツ！』

そして、私はあまりの味に気絶した。

「おはよひざります。アリエルお嬢様。お目覚めの気分はどうですか？」

「…………わりと最悪」

目が覚めるとセリアの顔。

……なんでセリアに膝枕されてんだろう？

「それはアリエルお嬢様が今日行くES研究所が楽しみで夜眠れなかつたため、車の中ですぐに寝てしまったからです」

そうだ。一週間くらい前、お父様にESを見てみたいと頼み込ん

で、今日、IIS研究所に連れてつてもらうことになつてたんだっけ。

それにしても、IIS研究所に行くのが楽しみで寝不足つて……遠足を楽しみにしてる小学生か……って小学生だったわね。私。

やつぱり、肉体が精神引きずられてるのかな？

「それで、アリエルお嬢様、随分どうなされていましたがどんな夢を見たのですか？」

「……砂糖の代わりにクエン酸を入れたホイップクリームをふんだんに使つたレモンサンドイッチを食べる夢を見たわ」

それはまた……と氣の毒そうな顔で私を見るセリア。

そう。あれはフルーツサンドと言つ名の地獄の酸（味）ドイツチだつた。甘味なんて全くなく、ただ死ぬほど酸っぱいだけのサンドイッチ。

ちなみに酸（味）ドイツチ食べて氣絶した後、ナイトオブファイブが何者かに暗殺されかけたと何故か事件になり、數ヶ月間皇宮で騒がれた。

「初めまして。IIS研究所所長のカトリアです」

「初めまして。アリエル・デュノアです。今日はよろしくお願ひします」

その後、IIS研究所に着いた私は迎えに来てくれたIIS研究所所長に挨拶する。

まだ、二十代を思わせる顔。保母さんみたいな優しそうな立ち振舞いと綺麗な顔立ち。髪は赤髪でふんわりとした香水の匂い。

その見た目と印象から、優秀な科学者と見てとれた。

「噂通り、行儀のいい娘ね。アリエルちゃんは」

「ありがとうございます」

行儀いい、頭がいいとよく言われてるので特に照れることもなく返事する。

「では、よろしくお願いします。カトリア所長」

「あれ？ セリアはついてこないの？」

「はい。ここから先は国家機密になりますから、一介のメイドの私は入れません」

「え。その場合、私も入れないんじゃない？」

「アリエルちゃんはIIS適正も調べるつて名田だから今回は特別ね

「……初耳なんですが」

「あれ？ 社長言つてなかつたの？」

お父様、IHの図の大切な」とせしつかりと言ひてください。

「それじゃ、IH適正を調べるのは後にして先に見学と行きましたよ」

カトリア所長が私の手をとり、歩き出す。

「じゃあ、まずは実際にIHを見てみる?」

「いえ、その前にIHのデータとかを見たいんですが……大丈夫ですか?」

さすがにIHのデータは見せてもらえないだらうなーと思いつつ一応聞いてみる。

「うーん。別に見せても良いけど、アリエルちゃんには難しくてわからなーと思うなー」

えー。いくら、社長の娘とはいえ、小学生に国家機密のIHデータ普通に見せてくれるの?

IHの研究所としての機密管理とか大丈夫なのかなーと本氣で心配になつてきた。

「問題ありません。今日のために勉強してきましたから」

「……本当、良くてきた娘ね。

じゃあ、特別に見せるけど誰にも言つちゃダメよ。これはお姉さんとの約束」

わかりました。と答え、心中でガツツポーズをする。

「はい。これがデュノア初の第一世代IS『プロトタイプラフアル』のデータ」パソコンに『プロトタイプラフアル』のデータを表示したウインドウを閲覧する。

……基本構造がまだ甘いわね。まあ、まだ第一世代だから当然か。あ、こここのバーツむしろ外したほうがいいんじゃない？と思いつながらデータを閲覧していだが、段々の私は困惑してきた。

イメージ・インターフェースはともかく、量子化技術、絶対防御とか明らかにオーバーテクノロジーじゃない！？

私が困惑したのはISの根幹を担う技術。イメージ・インターフェースは前世の世界で神経電位接続と似たような技術はあったが、操縦者全体を保護する絶対防御や量子化技術なんてものは前世の世界でも不可能だ。

そして、私が一番注目したのがPICO。

パッシブ・イナーシャル・キャンセラー

ISの浮遊・加速・停止を司る機関。

最初はフロートシステムと似た技術のものだと思ってたがデータを読み進めるうちにフロートシステムとは全く違う技術だと理解する。PICOはおそらく

「反重力システム？」

自然と口から出た。

「反重力システムなんて難しい言葉をよく知ってるわね。

確かに、アリエルちゃんが今見てるPICOには反重力システムが搭載されてるわよ」

隣にいたカトリアさんが反重力システムと肯定する。

それを聞いた私は自然と喉の奥からアハハと笑いが漏れてくる。

「……どうしたの、アリエルちゃん？」

「アハ、アハハハハ、アハハハハハハハハハハ！」

勝手ににやけてくる顔で狂ったかのように歓喜の笑いを上げる。隣にいるカトリアさんや近くにいる研究員がぎょっとした表情で私を見るが関係なく笑う。

私がこの世界に来て一番ショックだったのはこの世界にサクラダイトが存在しないことだった。ナイトメアフレームを初めとして、前世いた世界で使われていた技術のほとんどがサクラダイトを必要とする。

サクラダイトが存在しないため、前世の知識持っているのに、それを全く生かせないということだ。

しかし、PICOの反重力システムを使えば、前世で研究していた人工サクラダイトを作ることが可能だ。

そのことに気がつき、自然と歓喜の声を上げた私だが、その日からIIS研究所を始め、デュノア社の研究機関に所属する研究員から、社長の娘には邪悪なマッドサイエンティストがとり憑いているとい

「黒歴史とも言える噂が立つた。

……うん。今は反省もしてるし、後悔もある。

## 第一話アリヘルかやんHS研究員になる（前編）

HSやギアスを見直してたら「あなたに遅くに…？」

本当にすみません！

## 第一話アリエルちゃんHIS研究員になる

「IJさんに挨拶」

「いらっしゃい。アリエルちゃん」

IIS研究所に着き、挨拶するとカトリーナさんが出迎えてきた。

うん。相変わらず、カトリーナさんは綺麗でヒーロー科学者って感じだ。

「やうだ！ 今日はアリエルちゃんにプレゼントがあるのよ

「…………また魔除けのアリコ レシットとかじゃないですね？」

以前から、IJの研究員達に悪魔払いや魔除けといった道具をよくもらつたよね。主に十字架、聖水、お札、清めた塩、呪い移しの人形、銀の弾丸などなど古今東西。この前なんか「アリエルちゃん。いい子だからお姉さんと一緒に教会に行こうね」と言われたり、本物のエクソシストさんを呼ばれたりして本気で泣いた。

前世の記憶を持った私が言えた義理じゃないけど、科学者なのにオカルトを信じるなよ。

「ち、違つわよ。」れよ。…………ジャーンー

「これって……白衣？」

カトリーナさんから受け取つマジマジと白衣を見てみる。

うん。特に魔除けなどの変な模様も細工もない普通の小さな白衣だ。

「そ。白衣。アリエルちゃんがＩＳ研究所に来てからもう一年にもなるのに同じＩＳ研究所の仲間として、一人だけ白衣を着てないのはダメだ！」って思い、用意したの

一年。

そう。私が最初にこの研究所に来てから一年たち私は8歳になつた。

「えっと、私、研究員じゃありませんよ？」

「何言つてるの。アリエルちゃんは立派な科学者であり、このＩＳ研究所の研究員よ」

「そりそり。アリエルちゃんはこの一年、ほぼ毎日研究所に来て一緒に研究した仲間じゃない」

「むしろ、仲間と思つてなかつたらショックだわ。いつもお菓子あげてたのに」

「あんたそれ、餌付けしてるだけじゃない」

と、いつの間にか私達の話を聞いた数人の科学者が集まっていた。

……みんなが私のことをこんなに思つてゐる」と口頭が熱くな  
る。

「……盐さんありがとうございます。早速着てみますね」

白衣を着てみるとサイズはピッタリで袖が無駄に長いこと言ひましたが、もなかつた。

「……似合いますかね？」

「うんうん。とっても似合つてるよー。」

「キャー！ かわいい！ 抱き締めてもいいーー？」

「白衣を着た知的雰囲気を醸し出しながら上目遣いで見つめる幼女……これが日本でいうМОЕとこいつやつなのかーー？」

と研究員が暴走。

「はいはい。アリエルちゃんがかわいいのはわかつたからそろそろ作業に戻るー それとアンドレ、今日はもう休んでいいから今すぐら精神科の病院に行つてこい」

カトリーヌさんの一喝で不満を口に出しつつも作業に戻る研究員。

カトリーヌさん、グッジョブ！ あと、最期の人に関しては激しく同意です。今すぐ精神科に行け。

「じゃ、今日も頑張りましょ」

「はーー。」

そう言って私も研究員と一緒に作業をするのだった。

一年前。私は、PICOの反重力システムを知つてから私はIIS研究所に入り浸るようになつた。

早速、人工サクラダイトの製作をカトリアさんにお願いしたが、小学生の意見 しかも、いくら国の援助があるとしても使えるかどうかわからない物を作る予算はない なんか通るはずもなく却下された。

当然、私はその程度で諦めるつもりなんてなく、それを聞いた日、私は家に帰り、人工サクラダイトの製造方法、有用性、理論等を纏めたレポートをカトリアさんに提出し、再びお願いした。

そして、レポートを読んだはカトリアさんは人工サクラダイトに興味をもつたのか（私の熱意に根負けしたのかもしれないが）一度だけ製造実験してくれた。

結果は成功。本物のサクラダイトに負けないくらいの電導率を持つ人工サクラダイトができた。

この時、私は力の限り喜んだ。あ、言つておくけど、前みたいな狂喜の笑いはしてないからね。

これでサクラダイトを使用した兵器をIISに組み込める！ と、思つたのだが そう簡単にうまくいくはずもなく、別の問題が

待ち受けていた。

コストだ。人工サクラダイトを作るのにはEISの根幹一つにして金喰い虫のP.I.C技術を使うため、ものすごいコストお金がかかるのだ。

私は高いお金をかけてでも、人工サクラダイトを作る価値があると人工サクラダイトで作れる兵器 ブレイズルミナス、輻射波動、フロートシステム、ハドロン砲等 の理論を纏めたレポートを書き上げて、またカトリアさんに提出したのだが

「うーん。確かにどれもすごい発明なんだけどね……。  
ブレイズルミナスはすでにシールドエネルギーと絶対防御があるのに、さらにシールドを張る必要がないでしょ。

輻射波動。これは確かに強力な兵器なんだけど、シールドエネルギーを貫通する兵器はEIS規定違反になるからダメ。

フロートシステムもそんなもの使わなくてもEISは飛べるから言うまでもなく必要なし。

ハドロン砲みたいなビーム兵器を作るよりも、既に開発されている荷電粒子砲を研究したほうが圧倒的に安上がり。

よつて、EISに組み込む必要はなし」

と、論破し、一蹴された。その後もカトリアさんに人工サクラダイト有用性を説明しようとしても「ごめん。今忙しいからまた今度ね」と話も聞いてくれない始末。……ひょつとしてカトリアさんの中では、私はイロモノ科学者という扱いなのかも。と、心の中で膝をついたりもした。

そんな一年の苦労があり、今現在、私は何をしているのかというと。

「カトリアさん。フレームの開発状況ってどんな感じですか？」

「70%ってところね。来月中には完成できるわよ」

と言つて一緒に上を見上げる。そこには4、5メートルの大きさを持つロボット。ナイトメアフレームが鎮座していた。

## 第一話アリエルちゃんIIS研究員になる（後書き）

次話は早めに投稿する予定です。

## 第三話アリーハルちやん資金集めをする（前書き）

今日、ゲーセンでプレイブルー やつてて、 ュ(ミュー)か (ラムダ) が IIS 世界に飛ばされる話を書いてみたいと思ったけど、この二人が一夏たちと会話するイメージが全く思い浮かばない……。

## 第二話アリヘルちやん資金集めをする

人工サクラダイトを使った兵器を開発・研究をしたいが、人工サクラダイトを量産するには莫大な資金がかかる。なら莫大な資金を作ればいいじゃない！ というわけでこの世界初のKMFを製造中です。

うん。自分でも人工サクラダイトを量産する資金作りのためにKMFを作るとか色々ないわーと思う。

でも私の知識の中で一番お金が稼げる発明はこれしかなかつたの！ って、誰に言い訳してんだろ、私。

IJのKMF フレームは兵器用の機体ではなくない。運搬、建設、救助などに使う福祉を目的とした機体である。そもそも、現在デュノア社はISといつ超兵器を開発しているため、新兵器を作る余裕はない。それにサクラダイトを使用しないKMFは第4世代のグラスゴーくらいの性能しかでないしね。

ちなみに、カトリ亞さんはIS開発と兼任でKMF開発の主任になっている。もう、カトリ亞さんには一生頭が上がらないと思う。

「でもいいの？」

カトリ亞さんが少し困った顔をしながら、言つた。

「何がですか？」

「フレームを私の名前で発表すること

「KMF開発の主任はカトリーナさんじゃないですか。なら、カトリアさんの名前で発表するのが当然かと」

「確かにKMF開発の主任は私だけど、それはあくまで肩書き。KMFの基礎理論、OS、設計書などはアリエルちゃんが作ったですよ」

「まあ、確かにそうですが……。自分がいうのもなんですが、8歳の子供がKMF作ったって、色々不味くないですか?」

「…………」

何ですか、その「自覚はあつたんだ……」みたいな顔は。

「自覚はあつたんだ……」

実際に言いやがりましたよ。この人。

「でも、篠ノ之博士だって15歳の時にIOSを開発したわよ」

「あんなバグキャラと一緒にしないでください」

「……私が見れば貴女も十分バグキャラなんだけどなー」

「? すみません。聞こえなかったので、もう一度言つてくれませんか?」

「何でもないわ。気にしないで」

やつ言つて皿を反らすカトリアさん。なんて言つたんだろ？

「じゃ、フレームは私の名前で発表するつてことでいいのね？」

「はい。私が欲しいのは名前じゃなくて、人工サクラダイトを作る資金ですので」

「…………」

返事はなく……カトリアさんは何時もの笑顔ではなく真剣な表示を私に向けた。

「…………ねえ、アリエルちゃん。貴女は」「

「…………、…………、…………。」

「あ、すみません。時間になっちゃったみたいですね」

すぐに携帯を取りだし、PM17：30にセッティングしていたアラームを止める。

研究所に行くのは構わないが6時までには家に帰りなさい。とお父様に言いつづけられているため、私は5時半には帰宅しないといけない。……せめて、あと、1時間はここにいたいけどガマンガマン。

「じゃあ、私はこれで失礼しますね。また明日」

「う、うん。また明日ね。アリエルちゃん」

「……言つて私は研究所から出る。セリアを待たせちゃいけないから参りなさい。」

### Sideaカトリア

アリエルちゃんが研究所を去つていくまで振つてた手を下ろす。

「お疲れ様です。所長」

「あら、アンдрей、まだ病院に行つてなかつたの？」

「あれ、冗談じやなかつたんですか！？」

「本氣に決まつてゐるじやない。ロリコンが許される国は日本とロシアだけよ。……はい。これ、知り合ひがやつてる精神科の病院の住所」

住所をメモした紙を手渡す。受け取つたアンдрейがひでえ……と言つていたけど無視する。

暫くするとアンдрейは復活して、田の前に鎮座してくるフレームを見上げる。

「……それにしても凄いですよね。アリエルちゃんは

感心した声で答へアンドレ。私はその声に同意する。

「やうね。将来は篠ノ之博士を越えるかもね」

「まさか。いくら、あの娘が優秀でも篠ノ之博士を越えるなんて不可能」

「――の前、あの娘が携帯用ブレイズルミナスを完成させたの」

アンドレの声を遮る。

「ブレイズルミナス？……ああ、アリエルちゃんが書いたレポートにあったエネルギー・シールドでしたつけ？」

そういうや、1ヶ月くらい前、アリエルちゃんが主任に、人工サクラダイトを使った物を作りたいから色々パーツを用意して欲しいって頼まれましたね」

「ええ。それで携帯用ブレイズルミナスの強度実験をしたの」

「へえ、それでどうだつたんですか？」

「…………ラフラーに装備されている五五口径アサルトライフル『ヴォント』を普通に弾いたわ」

「……マジですか？」

アンドレがぐつだりとした声を上げる。私も強度実験したとき、そんな気持ちだったわ。

「でも、どうして所長はそれだけ強力なシールドをE.S.に組み込まないんですか？ E.S.のシールドエネルギーとは別のエネルギーで

展開させるブレイズルミナスは十分、組み込む価値があると思つんですが」

「そうね。ブレイズルミナスはISに組み込む価値がある兵装よ。それだけじゃない。アリエルちゃんが書いた兵器のほとんどが今すぐ、ISに装備せる価値があるわ」

そう。以前、アリエルちゃんが考案した兵器はISに組み込む必要がないと言つたけど、あんなのは真つ赤な嘘。本当は今すぐ採用できる兵器だ。

ブレイズルミナスはさつきも言つた通り、シールドエネルギーを消費しない強力なエネルギー・シールド。

輻射波動は確かにIS規定違反になるけど、あくまでも競技用ISでは規定違反になるだけで、軍用ISになら普通に組みめる。むしろ、対、IS戦にこれほど有効な兵器はないと言つても過言じやないでしょ。

フロートシステムだって、応用して浮遊機雷でも作ればかなり強力。

ハドロン砲も理論を読む限り、威力は従来のビーム兵器より上だから装備する価値は十分にある。

IJのIJとを話し、それを聞いたアンドレの顔は完全に青ざめてた。

「……確かに。8歳でそれだけ優秀なら将来、篠ノ之博士を越えるかもしませんね」

「ええ。悔しいけど、IJの研究所で一番優秀なのは、間違いなくあの娘ね」

本当、悔しいけどね。

「だったら、なおさらアリエルちゃんが作った兵器を採用するべきじゃ」

「だからといって、8歳の子供に人殺しの兵器を作らせる訳にはいかないわ」

ツ！

アンドレだけじゃなく、遠田で聞いていた研究員も強張る。

「JUJUにいる研究員達は様々な理由で兵器を作っている。国の発展のためと言つ人もいれば、単に兵器が好きだからとか、お金のためと言つ人もいる。だけど、ここにいるみんなは、自分達が人殺しの兵器を作っていると自覚し、兵器を作る責任も理解しているわ」

私の声に、研究員達の瞳に強い意志が宿る。

「いくら、アリエルちゃんが優秀でも、子供に人殺しの兵器を作る責任を負わせる訳にはいかない」

研究員達を見渡すと、頷き、作業に没頭する。いつの間にか、アンドレも自分の作業に戻っていた。私は研究員達の行動に満足し、すぐに作業に戻った。

……アリエルちゃんは知識だけでなく、8歳とは思えないくらい精神をもつていて。だから、多分、人殺しの兵器を作る自覚も

あるし、責任も理解していると思う。だから私は聞きたかった。

アリエルちゃん。貴女はどうして兵器を作りたいの？

## 第三話アリエルちゃん資金集めをする（後書き）

投稿する時間は決めたほうがいいかな？  
それとも、書いたら即、投稿するべき？

もし、決められた時間がいいなら、次回から19・00に投稿する予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3243t/>

---

IS～インフィニット・ストラatos～ギアス世界の科学者が転生しました  
2011年5月26日00時27分発行